

## 2022年度の学校教育活動に対する学校評価書

### 【目指す学校像】

#### (1) 教育目標

『自分のようにあなたの隣人を愛しなさい』の建学の精神のもと、キリスト教主義学校の特色と魅力に満ちた学校づくりを推進する。

#### (2) 目標具現化の柱

- ア 教職員の資質能力および組織力の向上を図る。
- イ 基本的生活習慣を確立させ、学校の教育活動全体の活性化を図る。
- ウ 基礎学力の定着を図るとともに、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育成する。
- エ 豊かな人間性や社会性を育成する。
- オ 安心・安全な充実した学校生活を通して、様々な活動に主体的に取り組む態度を育成する。
- カ 教育活動全体を通じたキャリア教育を推進する。
- キ 地域と学校の教育連携の推進と情報発信を充実する。
- ク 学校経営の安定化を図り、健全な学校経営を維持することで、充実した教育を提供する。

### 【目指す教職員像】

聖隸クリストファー中・高等学校の教職員は生徒人一人一人の成長を第一に考え、次のような教職員を目指し常に最善の努力をします。

- 1 生徒理解に努め、教育的愛情を注ぐ教職員
- 2 教育のプロとして専門的知識を持ち、実践力を発揮する教職員
- 3 協力・協働して職務を遂行する教職員
- 4 経営的視点で積極的に学校経営に参画する教職員

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

聖隸クリストファー中・高等学校 中高一貫コース

【2022年度の取り組み】 (重点目標はゴシック体で記載)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
ア	教職員の資質能力および組織力の向上を図る。	タグライン「誰かの幸せを、自分の喜びに」の実現のため、意識して取り組んだ教員 100%。	研修	A	昨年度の教員研修で決定したタグライン「誰かの幸せを、自分の喜びに」の実現のために意識して取り組んだ教員が 97.7% であった	A	評価は妥当と思える。
		新しい学習指導要領に対応した指導法、観点別評価の取り組み、観点別評価を理解する教員 100 %	研修 各教科 全教員	C	新学習指導要領に沿った本校の教育課程を作成できた。観点別評価は高校 1 年生の評価において初めて行われたが大きな混乱は起きた。理解が深まった教員が 71%。年 2 回の授業研究日で取り上げることはできた。もう少し定期的な研修が必要。	B	働き方改革の中で研修を入れるのは大変だが、オンラインなど工夫を凝らして組織的計画的に実施しているのは良いことだ。
		各教科全員 1 回授業参観を実施する。また、他教科の授業を 1 回以上参観する。	研修 各教科 全教員	B	全教員が授業公開 1 回と授業参観 1 回を実施した。授業アンケートの作成、実施はできたが積極的に授業改善を行うには、内容に厳しさを盛り込む必要がある。	B	授業アンケート研修は良いことだ。
		各学年・分掌で業務改善に関する取組 1 件以上。「取り組むことができた」と答える教員 60% 以上。	全教員	A	67.9% の教員が取り組んだ。分掌内では業務量を確認し、来年度の業務分担の検討に入り、次年度から実施予定となっている分掌がある。	A	会議の時間短縮、従来より早くの帰宅の励行などが進んでいて良いことだ。継続してほしい。
イ	基本的生活習慣を確立させる。	「さわやかな挨拶ができ、身だしなみに気を付けている」と答える生徒 80% 以上。 「校則やマナーを守っている」と答える生徒 80% 以上。 「提出物の期限厳守や与えられた役割を責任もって果たしている」と答える生徒 80% 以上。	生徒指導 各学年	A	95.1% の生徒が挨拶・身だしなみに気をつけて生活できている。あいさつ運動は計画し、実施したが、コロナ感染再拡大により、計画通りに実施できなかった。 96.8% の生徒が校則を守って生活できている提出物をほぼ提出している生徒が 86.7%。提出物のチェックも各クラスでしている。	A	評価は妥当と思える。
		「学校行事により自己肯定感が高められた」と答える生徒 80% 以上	生徒指導 生徒会	A	学校行事に関わり自己肯定感が高められたと感じる生徒が 92.8% である。	A	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
イ		生徒・職員に対して講習会を中学2回、高1を1回以上行う。ネット依存調査を1回以上行う。 「情報モラルに注意している」と答える生徒100%。	生徒指導	C	ネット安全講習は中高全校対象で1学期に実施、中学生対象を2学期に実施。74.9%の生徒が情報モラルに注意しているが、意識の薄い生徒の意識向上が課題である。スマートフォンの使用についての一般的な注意は行ったが、家庭での使用方法について保護者と連携するなどの指導は今後の課題である。	C	スマートフォンの課程での使用については、なかなか踏み込めないことが理解できる。
		「欠席・遅刻・早退をしないように努力している」と答える生徒90%以上。 毎日朝食摂取95%以上。 睡眠時間6時間確保60%以上。	全教員 保健 生徒指導		A	A	評価は妥当と思える。
		「交通法規を守ろうと意識している」と答える生徒90%以上。 重大な交通事故ゼロ。	生徒指導	B	全校の交通安全教室に加え、自転車安全運転体験講習を実施し、安全意識の向上に努めることができた。 結果として98.8%の生徒が交通法規を意識しているが、事故は発生しているため、注意喚起を継続する必要がある。	B	北区の交通量が増え、従来通らなかった道路も利用され危険が増している。自治会はこれからも信号設置等働きかけをしていく。
ウ	基礎学力の定着を図るとともに、生徒が主体的に学習に取り組む態度を育成する。	「興味・関心や意欲を高める授業が行われている」と答える生徒80%以上。 「授業の内容がよく分かる」と答える生徒80%以上。	教務 各教科	B	興味、関心、意欲を高める授業の実施は79.3%、よく分かる授業は79.9%。今後とも生徒を寝させない授業の工夫と努力をこれまで以上に必要である。 スタディサプリの普及のために教務部会や学年会においてリクルートによる研修を企画した。今後、年度内に教科ごとでも研修を行う予定である。 授業配信用のタブレットの確保、撮影スタンドを購入し、出席停止の生徒へ配信ができるようになった。	B	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
ウ	「学力が向上する課題が行われている」と答える生徒が90%以上。	各教科研修	B	学力向上と感じる課題は78.9%である。課題の精査見直しについて、研修委員会としてはできなかった。但し、授業アンケートの中に類似項目があるのでそちらを数値比較する予定。（授業アンケートの結果は2月中旬に分かる予定）	B	評価は妥当と思える。	
	テストについて、精選・見直しが行われ、測定ツールとしての機能を果たし、「生徒の学力伸長」、「教職員の指導改善」に結び付くものとなる。測定ツールで把握した学力に基づき授業改善に取り組む教員90%以上	教務各教科	C	テストの難易度を適正にするために解答速度が作成者に伝わるような工夫をテストの表紙に施した。 テストを授業改善に繋げることができたと答える教員71%（回答39人）であった。	C	評価は妥当と思える。	
	予備校等の研修会等に教職員が積極的・意欲的に参加人数が10人以上。	進路指導教務英数科	C	予備校対面研修（計5回）、オンライン研修（計5回）、計10回参加。英数科教科担当に対して、予備校の研修会（最近はオンラインがほとんど。教科指導、入試動向、進路指導など）などを10回程度案内した。また、他の分掌に予備校主催の研修会の案内が回覧されなかったケースがあった。教務関係の研修出張は3人であった。	C	評価は妥当と思える。	
	図書館利用者数及び年間貸出数を増加させる。 不読者をゼロにする。	図書	D	図書館を個人的に利用した生徒は13.2%、読書習慣が付いたと感じる生徒は56.6%である。 授業における図書館利用が増えたため、利用者数そのものは増えているが、本の貸出数は微増であった。また、図書館イベントなどを毎月実施したが、参加者は少なく、読書をしない生徒も4分の1ほどいる。	B	小学校・中学校時からの読書の習慣づけが大切である。 興味のある本であれば読むので、それを深く読み続けることが大切だ。	

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
エ	豊かな人間性や社会性を育成する。	「建学の精神や教育方針を分かりやすく伝えている」と答える生徒、保護者 90%以上。	各教職員 宗教	B	毎日の礼拝、花の日、特別礼拝、クリスマス礼拝等、生徒・教員の協力のもと、実施し、建学の精神、本校の伝統を伝えることができた。特別礼拝をサーラ音楽ホールで実施することができた。82.4%の生徒が建学の精神を理解できていると考えているが、今後も理解を深めるため、伝統を踏まえつつ、内容を充実させたい。保護者へのアンケートは未実施。	B	評価は妥当と思える。
		聖隸クリストファー一生が地域社会の担い手であるという自覚を持ち、自ら地域と関わることで、「『隣人愛』の意識が高まることができた」と答える生徒が 80%以上。	労作 各担任		A	コロナ感染症の拡大など様々な制限の中、自ら意欲的に活動し、他者に寄り添い何事にも心を込めて取り組み隣人愛を実践した。生徒が、地域社会の担い手としての自覚を持ち、「隣人愛」の意識が高まったと答えた生徒は 88.6%である。	A
		「集団の中の一員として仲間を尊重し、行動できる」と答えた生徒 90%以上。 「学校が楽しい」と答える生徒が 80%以上。	生徒支援 担任	A	「集団の中の一員として仲間を尊重し、行動できる」と答えた生徒は 93%。 「学校が楽しい」と答えた生徒は 88%で目標を達成できた。 4月にグループエンカウンター研修を行い、クラス開きを工夫できたことも要因と考えている。ピアサポートを含め、これらを継続的に行う	A	評価は妥当と思える。
		「ボランティア活動、体験学習、生徒会活動等地域と連携した（地域に貢献した）活動に参加した」と答える生徒 70%以上。	生徒指導 生徒会 労作 各部活動		各ボランティア活動、体験学習、生徒会活動等地域と連携した（地域に貢献した）活動に参加した」と答える生徒は 60.4%である。 部活動に提案する予定でしたが、コロナが収まらない中、計画が進まなかった。 竹林労作を通して労働の厳しさを知ることと、仲間との協働が地域貢献につながっていることを学んだ		評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
エ		「部活動により人間力が高められた」と答える生徒 80%以上。 「部活動と学習活動を両立させている」と答える生徒 70%以上	部活動顧問	B	「部活動により人間力が高められた」と感じる生徒は 85%。 「部活動と学習活動を両立させている」と答える生徒は 65.5%である。	B	評価は妥当と思える。
オ	安心・安全な充実した学校生活を通して様々な活動に主体的に取り組む態度を育成する。	「健康、安全の確保に関する指導が適切に行われている」と答える生徒が 90%以上、教職員 100%。	保健全教職員	A	消毒用アルコールの設置や黙食指導などを適切に行うことができた。 指導が適切に行われていると答える生徒は 91%、教員は 100%と成果が見られた。	A	評価は妥当と思える。
		困りごとの早期発見と情報共有。生徒個々の心の安定と安心感のある学校生活を送ることができるような環境にする教員 100%。	生徒支援各教員	A	心の安定と安心感のある学校生活を送っていると感じる生徒は 83.4%である。 スクールカウンセラーが常駐することで生徒や保護者の困りごとを情報共有することができた。 この環境づくりできたと答える教員も 100%であった。	A	評価は妥当と思える。
		支援対象生徒のカルテを整備し、生徒の状況、支援方針や支援計画等の情報を共有する教員 100%。	生徒支援	D	生徒支援カルテの一環として、シームズへの入力をお願いしたが、徹底することができず、カルテ整備ができたと答えた教員は 37%にとどまった。	D	教員に気づきがあった時にすぐ入力することが必要だ。
		保健室登校、別室登校、不登校の生徒への対応をしっかり行い、転退学をさせない指導をする教員 100%。	生徒支援保健各教員	B	欠席が多くなった生徒に対して適切に声掛けをし、また、家庭への電話を必ず行うようになった。 必要な場合には、スクールカウンセラーへつなげることができた。 また、転退学をさせない指導をしていると答えた教員は 89%であり、成果がみられた。	B	評価は妥当と思える。
		体罰及びいじめについて、いずれも“ゼロ”。	各教員生徒指導	A	いじめアンケート 1 学期、2 学期実施。人間関係のトラブル等を早期に対応することができた。 人間関係のトラブル等はあるが、いじめや体罰とされるものはなかった。	A	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
カ	教育活動全体を通じたキャリア教育の推進をする。	「自分の将来の生き方(進路等)について考えている」と答える生徒90%以上。	進路指導 各学年 中学部	B	LHRや大学見学、探究活動をもとに、自分の進路について考えさせるきっかけを与えるようにしてきた。 81%の生徒が自分の将来の生き方について考えていると答えた。 高2は研修旅行の準備のためにLHRを利用した回数が多く、1年次からのキャリア教育の積み上げが一時中断した。 高1対象でキャリア学習プログラム(LOCUS)を導入し、高2の1学期まで継続する。	B	評価は妥当と思える。
		医療系への進学希望者が、この領域の「仕事について理解することができた」と答える生徒90%以上	進路指導 聖隸P 英数科		例年以上に併設校推薦(看護)での進学者が多かった。(16人)高3生の医療系進学者の100%の生徒が自らの仕事について理解することができたと答えた。	A	評価は妥当と思える。
		進路希望分野の探究活動を行い、「読解力及び論述力を身に付けることができた」生徒80%以上	進路指導	A	昨年より導入した冊子を用い、きめ細やかな添削を行った。79.2%の生徒が読解力や論理力が身に付いたと答えた。	A	評価は妥当と思える。
キ	地域と学校教育連携の推進と情報発信を充実する。	ホームページの更新回数、行事ごとに100%。 新聞掲載の回数年10回以上。 小・中・地域へのPR年2回以上。	入試広報 総務	D	大小の学校行事等のHPへのアップ率は27%、部活動を除く新聞掲載は1回であった。部活動の結果はタイムリーに発信することができた。 次年度はHPアップ、プレスリリース、小中地域へのPRのリストを事前に作成し、担当者が計画に沿って実施する必要がある。	D	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

	取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
				評価	達成状況	評価	意見
キ		「社会に役立つ姿勢や資質を身に付ける教育が行われている」と答える生徒、保護者 90%以上	進路指導 各学年	B	社会に役立つ姿勢や資質を身に付ける教育が行われていると思う生徒は 70.6%である。保護者への調査は未実施。 大学見学や労作の授業を通じて、社会との関わりについて意識するよう声掛けをした。 86.8%の生徒が成果目標の教育が行われていると答えた。労作授業の中で積極的に展開して体験を積んでいる。 キャリア学習プログラム (LOCUS) で浜松の活性化についてグループワークを行った。	B	評価は妥当と思える。
		地域の防災訓練参加率 70%以上 「地震や暴風警報発令時等の行動、避難先や避難経路を把握している」生徒 80%、保護者 80%以上。	渉外		C 地域防災への参加率は、参加が許される地区での参加率が 50%であった。 地震や暴風警報発令時等の行動、避難先や避難経路を把握している生徒は 71%。 活動としては、年 2 回 (4・9 月) 小学校と合同避難訓練を実施し、避難経路の確認と防災教育を行った。8 月に教員対象の防災研修を実施した。	C	根洗町自治会の防災訓練に聖隸クリストファーの生徒も参加して手伝ってもらいたい。
ク	安定した学校運営	中学校60人、高等学校定員以上 オープンスクールや説明会における小・中学生への本校の好印象度、大変満足が70%以上。 転退学者、中学校0人、高等学校10人未満。	入試広報 総務 各学年 各教員	B	中学募集では、出願者数は昨年度より増加したが、入学者数は年度当初目標に及ばなかった。またイベント参加者の 82%が大変満足と回答してもらえ、イベントにおける好印象度の目標は達成できた。 高校の生徒募集では、単願者数と内進生数の合計からして、併願者の戻りで定員確保は見込めると思われる。 保護者対応等、工夫しているが、高校全体で転退学者が出た。中学校の転退学者はいなかった。	B	評価は妥当と思える。
		内進生の英数科進学数を30人以上にする。(来年度入学生から) 英数科(定員 94 人) 70 人以上を目指す。(2025 年度)	入試広報 中学校担当教員		B 来年度英数科内進生数は中学 3 学年の 77% と高い割合である。 また、英数科目目標数は達成が難しい状況である。	B	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

聖隸クリストファー中・高等学校

グローバルスクールコース

【2022年度の取り組み】

取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
			評価	達成状況	評価	意見
建学の精神を礎に、生徒・保護者・教員が互いに信頼を深め教育活動を展開する。	建学の精神の理解が深まったと答える教員 100%。	宗教部 各教員	A	建学の精神の理解が深まった教員が 100%だった。	A	評価は妥当と思える。
	学校生活を通して、まわりの人と支え合うことの大切さを学んだと答える生徒 90%以上。	担任	A	90.6%の生徒が、まわりの人と支え合うことの大切さを学んだと答えた。	A	評価は妥当と思える。
	GSC に入学させて良かったと答える生徒・保護者 100%	各教員	B	年度末の調査では、100%の生徒と 91.7%の保護者が肯定的な解答をしているが、転学者が出ている点を考慮に入れなくてはならない。	B	評価は妥当と思える。
コースの独自性・特徴を生かした教育活動を実施する。	国際バカロレア (IB) の基準を踏まえた教科シラバス、アセスメント方法、学習スキル項目を完成する。	IB 担当 各教科	C	ほぼ完成に近づくことができたが、実施しながら改善を重ねている状況である。	C	国際バカロレアの基準を踏まえた教科シラバス等はどのようなものかを知りたい。
	英語力が向上していると感じる生徒 100%	IB 担当 各教科	B	91.7%の生徒が英語力の向上を実感しているが、実際の英語力としては、アウトプットの力がまだ十分身に付いていない。	B	評価は妥当と思える。
	主体的に学習に取り組めたと感じる生徒 80%	IB 担当 各教科	A	91.7%の生徒が主体的に学習に取り組めたと答えた。主体的な取り組みは、GSC の生徒の特長として現れている。	A	評価は妥当と思える。
	探究型の教育手法を十分に理解・実践できていると答える教員 80%以上	IB 担当 各教科	C	十分に理解・実践できている教員は 50%で、その他の教員は部分的に理解・実践できているという自己評価だった。	C	評価は妥当と思える。

評価の指標…A(十分に成果があった)、B(成果があった)、C(少し成果があった)、D(成果がなかった、取組みできなかった)

取組目標	成果目標	担当部署	自己評価		学校関係者評価	
			評価	達成状況	評価	意見
安心・安全な充実した学校生活を通して、様々な活動に主体的に取り組む態度を育成する。	「十分な新型コロナウイルス感染症対策をしている」と答える保護者・教職員 100%。	各教員	A	100%の保護者・教員が、感染症対策がなされていたと答え、GSCの中で感染が拡大することはなかった。	A	評価は妥当と思える。
	発達支援に関する教員研修を 1 回実施する。	各教員	B	教員研修会を実施し、個別支援の理解を深めることができた。	B	評価は妥当と思える。
	転学者 0 人	各教員	D	転学者があった。	D	評価は妥当と思える。
教員体制の充実	離職率 0 %。	管理職	A	離職者 0 人。	A	評価は妥当と思える。
安定した学校経営。	2023 年度入学者 30 人	入試広報 総務	D	2023 年度入学者見込みは 13 人となつた。	D	評価は妥当と思える。